仮面ライダーザン　剣客稼業

朽麿呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーザン　剣客稼業

【Ｎコード】
Ｎ７１９１Ｙ

【作者名】
朽麿呂

【あらすじ】
ここは、とある世界に存在する地区「佐神市」
この町で便利屋を構える青年「諫山誠也」
普段は入った依頼をこなし、時間が空けば猫と遊び、時に町へ繰り出す。
そんな彼のもう一つの顔・・・それは町の守護神「仮面ライダー」だった。
無双の剣客が今、町を駆ける！

プロローグ　ー友からの手紙ー（前書き）

まず、まだ仮面ライダーは登場しません。
それから主人公もです。
これはプロローグですので何卒、ご容赦くださいm（＿＿）m

プロローグ　ー友からの手紙ー

びっくりしたよ、居酒屋で飲んで帰ろうとしたらいきなり変な音・・・何かが倒れたみたいな？でかい音がするからさ。
気になって音が聞こえた方に行ってみたら、なんだか変なんだよ。
一瞬真っ暗の道に綺麗な青白い線が浮いてるのが見えてね。
周りで青いのがキラキラしてたなあ。
あと緑の光ったのが２つ、丁度人の頭くらいの高さのところに浮いてた。
怖くはなかったね、実際なんにもなんなかったし。
ああ言うのを人魂って言うの？

「ある男の証言」

ここ最近、地下から不審な音が聞こえるって苦情がありましてね。
あんまり多いものだから、私、見に行かざるを得なくなっちゃったんです。
マンホールから下水道に降りたら、なんか酷い臭いがして・・・まあ下水なので当たり前ですな。
５分ほど歩き回りましたが何もないので、帰ろうとしたとこです。
何か柔らかいものを踏みまして。
ライトで足下を照らしましたら、でっかいトカゲみたいなのが死んでましてね。
犬くらいあったんです、びっくりしてライト落としてしまいました。
そんで出会しちゃったんです。
緑の鋭い眼が光ってました、片方の眼だけで野球ボールくらい、大きさはそれくらいなんですが・・バナナみたいな形してたなあ。
まあバナナよりは直線だし尖ってましたがね。
よく見ると人型の何かがいるんです、で気が付くと事務所で寝てましたね。

服が臭かったので夢じゃあないですよ。それからライトも無くなってました。
誰にも言わんで下さいよ！？

「下水管理員の告白」

と、言うわけでこの件を君に頼みたい。
僕は偶然ここに仕事に来ていたから、今までは調べられた。
でも、任期が終わって今は次の職場だ。
また偶然ここに仕事で来れるとは到底思えない。
だったら、そこに住んでいる君に調べてもらえばいい、そう思ったのさ。
勿論、報酬は用意する。
君は友人からも報酬を取るんだからがめついよ。
つまり、依頼内容は「佐神市内に出没する怪人物の正体を突き止めろ」こんな感じだね。
ちなみに上の文は僕が町にいたときに自力で聞き出した情報さ。捜査の役に立てば嬉しい。
出来れば、２週間くらいで調べて欲しい、気になってしようがないんだ。
僕自身があれを見てなきゃ、こんな依頼しないんだけどね。
それでは、改めて仕事を頼もう。
無事を祈る（冗談）

「親愛なる友、矢崎徹平より」

プロローグ　ー友からの手紙ー（後書き）

みなさん今晩は、朽磨呂です。
この度は本作「仮面ライダーザン　剣客稼業」をお読みいただきありがとうございました。

まあ、まず皆さん絶対思われたこと。
「なんだこのつまらん話は・・・」
なんて言ったって手紙の内容だけ！これは聖徳太子も寝耳に水！（ん？）
まだプロローグですから・・・言い訳ですね、ごめんなさい。
ただ、しつこいですがこれはプロローグ、まだ失望するには早いです！（期待している人がいるかはともかく）

まずは一歩、これからこの作品をよろしくお願いします。

第一話「愛猫剣客いざ参る！」（前書き）

さあ、漸く完成第一話です！

第一話「愛猫剣客いざ参る！」

「まったくあいつめ、調子の良いことを」

諫山誠也（いさやま　せいや）は、友人・矢崎徹平からの手紙を読み苦笑いした。

ここは誠也の経営する便利屋「風花（かざはな）」の事務所だ。
人員は彼一人、誠也は人を雇う気は無い。
それでも仕事が片づくのは、誠也の手腕故か、はたまた仕事が少ないだけか。

「友人からも金を取るからがめつい？当たり前だ、そうしなきゃ喰っていけないんだぜ？」

この辺はまだ笑っていられる。ただ、依頼内容が問題だった。
内容は「佐神市内に出没する怪人物の正体を突き止めろ」
これには頭を抱えざるを得ない。

「どうしよっかね～・・・ん？黄泉？」

頭を抱えていると、誠也の足下に黒猫が纏わりついてきた。
飼い猫の黄泉だ。
つい三ヶ月前まで、彼女は捨て猫だった。
しかし、偶然近くを通りがかった誠也が食事を与えたため懐いてしまい、今は誠也が養っている。
誠也が落ち込んだ時や、困っている時には励ましてもくれる、独り身の誠也には大切な家族だ。

「お～よしよし、お前はご主人の心労がよくわかる良い猫だなあ、可愛いやつめ」

頭を撫でてやると、黄泉は一声鳴いた後、誠也から離れていった。

「困ったが・・・まあ、何とかなるさ。じゃあ気晴らしにちょいと町に繰り出すか！黄泉、留守番してろよー」

誠也は事務所を出ることにした。

何故か、腰のベルトにおもちゃの刀を差して・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

はじめにこの便利屋について説明しよう。

店の名前は「風花」

店名の由来は開店当時に誠也が好きだった歌から、つまり適当に付けた名前である。

営業を始めたのは去年の終わり頃。

経営者は諫山誠也、１９歳。

事務所は縦に長い二階建ての上階にある。

一階は少し前まで店があったらしいが今はなくなり、現在は事務所のガレージに改装されている。

事務所の外の扉には「捜し物、お掃除、なんでもござれ！（危険な仕事も応相談）」とある。

「さてさて、どこ行こっかなーっと」

誠也は事務所を出た後、商店街をぶらつきはじめた。

八百屋に魚屋、それから揚げ物屋などがある。

（黄泉に何か魚を買っていってやるか）

誠也は魚屋の店主に声を掛けた。

「店主さん、安めのを三匹下さいな」

「お、諫山さん！・・・その様子だと儲かってないね？」

「ええい、言ってくれるねー・・まあ安めのって言っちゃったからね」

誠也と店主は笑いあった。

この町で諫山誠也を知らない人間は珍しい。

当然だが、腰におもちゃの刀を差した人物が目立たないわけがない。

ある意味、彼はこの町の有名人だった。

「じゃあね、また買いに・・次は高いのを！」

「ははは、お越しになるのを待ってますよー」

誠也は秋刀魚を三匹入れた袋を持ち、途中喫茶店に立ち寄ってから家路についた。

「お～い黄泉ちゃーん、魚だぞー」

するとソファーの陰から黄泉が走ってきた。

「魚」、黄泉はこの言葉に反応する。賢い猫だ。

誠也は秋刀魚のうち一匹を黄泉に与えた後、残りを冷蔵庫に入れ椅子に腰掛けた。

「やっぱ、今日は仕事が入らないな」

それから誠也は黄泉と遊び、資料の整理を行い、ラジオを聴き、い

つの間にか三時間がたち五時になった。

「結局来なかったか・・黄泉、公園行こう」

公園の木々や遊具は夕日に照らされ美しかった。
誠也はこの時間が好きだ。
夕日の匂いを感じると、いくら重大な問題を抱えていても和やかな気分になれる。
誠也はベンチに腰掛けた。

「黄泉、そんなに長居はしないんだから寝るなよ?」

黄泉が誠也の膝に乗った。
本当はこのままじっとしていたい。だが、そうもいかない。
十分ほど経った頃、誠也は帰るために黄泉を見た。
しかし、黄泉は寝息を立てていた。

(これほど気持ちがいい夕日なら無理もないか・・・可愛いな)

誠也は黄泉が起きないように抱き上げ、事務所に戻った。

ーーーーーーーーーーーー

事務所に帰り着いた誠也は、まず黄泉をソファーに寝かせた。
その後、食事の用意を始めた。
今日は秋刀魚の塩焼きだ(途中、黄泉が起きてきたので少し分け与えた)
食事が終わったのでテレビを見たり、黄泉を構ったり、木刀を素振りしたりする内に時間は過ぎた。
時刻は午後八時。

再び黄泉を寝かせると、誠也は事務所を出た。
一階のガレージに行き、バイクに跨がる。
誠也は港に向かった。

港は静まりかえっていた。
誠也はバイクを停めると、防波堤まで歩いた。
波は穏やかに揺れている、いたって自然な光景だ、不自然なものは見当たらない。
しかし、今日はここに奴らが来る・・・誠也には判っていた。
突然、海面が泡立った。
次の瞬間、緑の何かが水中から飛び立ち誠也のすぐ近くに降りた。

「それ」は濃い緑のぬらぬらした肌で、身体はほっそりとしていた。
薄く透けた羽、蛇に似た顔、鋭い爪。

「案の定、今日の相手は蛟（みずち）か」

蛟は「ギュウギュウ」と気味の悪い声を発しながら誠也に近づいた。
しかし、誠也に怯えは微塵もない。
誠也は着ていたジャケットの内ポケットから奇妙なものを取り出した。
それは、中央に鍵穴が付いた丸みを帯びた長方形の黒い箱のようなもので、銀色の鍵穴が目立っていた。

「私を喰う気だな？それは困る」

誠也は奇妙なもの＝ライダーバックルを腰に付けた。
すると誠也の腰に純白のベルトが巻かれる。
次に彼はおもちゃの刀を鞘ごと腰から抜き、左手に持つ。
誠也はポケットから取り出した小さな物体＝トランスキーをバック

ルに差し込んだ。
次の瞬間、鍵が一瞬で取り込まれ、バックルが変化した。
縁に銀色の模様、中央に金色の紋章が現れ、若干大型化した。
「被害を出すわけにはいかなくてね、・・・変身！」
誠也は刀を一旦左腰に引き付けてから前方で水平に構えると、変身ポーズをとり叫んだ。
誠也を緑の光が包み、彼の身体に黒の鎧が重なった。
４ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
緑色の鋭い複眼。
全体的に黒、その黒を赤と白が彩る装甲。
腰に付いていたおもちゃの刀は真剣「水晶刀・岩斬り」に変わっていた。
「おい、今ならまだ見逃してやるが、どうする？」
しかし、蛟は誠也に向かって走り出した。
判りきった結果ではあったが、誠也は残念そうに肩を竦めた。
「やれやれ・・・冥土の土産に聞いておけ。我が名は、仮面ライダーザン！」
誠也＝仮面ライダーザンは、蛟があと四歩ほどまで近づくと、おもむろに鞘から刀身を抜き放つ。
刀身はまるで水のように透き通り、そして美しかった。
ザンは間を見計らい、上段に構えた岩斬りを一気に振り下ろす。
光の粒子が宙を舞う。

後少しでザンに触れるはずだった蛟の身体が、次の瞬間無惨にも二つに別れた。

ザンは鞘に刀を収めた。
しかし、まだ戦いは終わっていない。
海面から次々と蛟が飛び出してきた。一匹ではなかったようだ。
ザンは慌てずに居合いで空中の蛟を三匹仕留め、残った蛟を数える。

「・・ふむ、後七匹か。手間を掛けてはいられんな」

ザンはベルトからバックルを外した。
バックルを左手に持ち、バックルの裏側を刀身に軽く当てると刃の先まで滑らせる。
するとバックルが触れた辺りから刀身が青く光り始めた。

?ｄｒｉｖｅ?
「さて・・・・」

バックルから電子音声が響いた。
ザンは蛟達が近づくのを待つ、引き付けてから討つ気だ。
一番近い蛟が爪で攻撃してきた。
ザンは蹴りで蛟の腕を弾き、後退させる。

「はあ！」

ザンは後退した蛟に張り付くと、刀を横に振り回した。
何が起きたのだろう、振った途端に刀身が明らかに長くなった。
エネルギーを消費することで刀の攻撃範囲及び切れ味を強化し、広範囲を斬り伏せる必殺技「光刃」
ザンを囲んでいた蛟が容赦なく横なぎに斬られ、辺り一帯に粒子が

舞い散る。

「錆になれ」

最後に、ザンは自分が張り付いていた蛟を刀の柄で突き後退させると、三度斬撃を浴びせ収刀した。
刹那、斬られた蛟達の身体が地に崩れ落ちた、いわゆる「殺陣（たて）」である。
誠也は変身を解除すると蛟達の遺骸に合掌し、何食わぬ顔でバイクに跨がり町へ向かう。
偶然見つけた屋台で焼き鳥の皮を食すと、少し遠回りで事務所に戻った。

時刻は午後九時三十分
事務所に帰ると誠也はまず風呂に入った。
それから歯磨きを忘れずに行い寝室へ。
寝間着に着替え、布団に入る。
すると寝室の扉を引っかく音と鳴き声が聞こえた。

「黄泉、寝てなかったのか・・待ってろ今開けるからな」

誠也は布団から出ると、扉を開けた。
黄泉が室内に入り誠也の足に纏わりつく。

「お前なあ、まったく・・・」

溜め息を吐くものの嬉しそうな誠也。
布団に入ると黄泉も入ってきた。

「こら、舐めるな、眠れないだろ」

誠也が黄泉を優しく抱きしめた。黄泉が鳴き声を上げる。
そして、便利屋「風花」の一日は漸く終わった。

第一話「愛猫剣客いざ参る！」（後書き）

皆さんこんにちは、朽磨呂です。
お読みいただきありがとうございます。

なんとか第一話、完成しました。
なかなか設定考えるのに苦戦しまして、予定より遅い完成です。

まず何で詰まったか。
便利屋の名前です。
探偵なら「諫山探偵事務所」で済んだのですが。
それから変身ポーズ、伝わっただろうかと心配です。
初めは仮面ライダー1号のものにアレンジを加えてみようかなと思ったのですが、結局オリジナルに落ち着きました。

これからもよろしくおねがいします。

第二話「暗闇の鍵（前編）」（前書き）

久々に更新しました。
戦闘シーン無し、あまり楽しめませんよね。

第二話「暗闇の鍵（前編）」

１２月１４日　午前６時３８分

誠也は起床すると、まず台所で朝食を作ることにした。
今日は味噌汁にご飯、それから沢庵、と和食の典型といった感じだ。
誠也は味噌汁が煮え、ご飯が炊けるまでの間、昨日届いた友人からの手紙を読み直した。

（上の２つの文、特徴的にどう考えてもザンのこと言ってるよなあ・・）

手紙の内容に含まれていた目撃談、どちらも間違いなくザンのことを見たのだろう。
そもそも、下水道の件については誠也にも覚えがあった。
下水道に出没した妖魔を仕留め帰ろうとしたところ下水道の管理人が倒れており、仕方なく気絶した彼を管理人事務所に運んだのだ。

（どうしようか、矢崎の奴はどうしてこうも面倒な依頼を・・・）

そこへ、黄泉が起きてきた。
まだ眠そうだ。

「おー黄泉おはよう、さあおいで」

黄泉を膝に乗せ、依頼について考えるうちに味噌汁は煮え、ご飯は炊けた。

「まあ、どうにでもなるさ」

誠也は朝食をとるために動き出した。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

朝食を食べ終わった誠也はまず私服に着替え、それから食器を片づけた。
その後、事務所の椅子に腰掛け客を待つ。
勿論、その間ずっと椅子に座っているだけのはずもなく、黄泉を構ったり事務所を掃除したり、ラジオを聴いたり本を読んだりしていた。
１１時時頃だった。
事務所のドアが開き、１人の男性が入ってきた。

「失礼します、こんにちは」
「ようこそお客さん、こんにちは。まずお名前は？」
「古畑です、古い畑で古畑と書きます」

男性は茶髪で、背広姿だった。
年齢は４０に入った辺りか。

「はい、古畑さんですね、今回はどのようなご用でしょう？」
「鍵を捜していただきたいのです、金庫の」

誠也は依頼の内容を聞いた。内容によっては請け負い難いものもある。

「ふむ、まずはお掛けください」

誠也は古畑をソファに掛けさせた。

「鍵ですか、どこで無くされました？」
「どこで無くしたか判らなくて、申し訳ない」
誠也は唸った。
無くした場所が判らないとなると探しようがない。
「いいえ・・弱ったなあ、流石にそれだけだと厳しい・・もう少し詳しくお願いできませんか？例えば、いつまで手元にあって、いつ無くしたことに気がついたか、お茶をどうぞ」
誠也は依頼内容などを手帳に書き込みながら聞いた。
「いえ、お構いなく、えーと・・・・・あ、最後に鍵を見たのは一昨日の午後３時頃で、無くしたのに気づいたのは午後９時頃です」
誠也は更に聞く。
「その間に行った場所は覚えていますか？」
「はい、案内も出来るかと」
「では、案内願います。場所さえ判れば後は私だけでも大丈夫ですからね」
誠也は外出で帰りが遅くなった時のために黄泉の餌を用意し、それから
「ご用の方は電話番号を書いた紙をポストにお入れください」
と書いた札を事務所のドアの外に掛けた。
「さて、案内頼みますね」
「お願いします」

２人は事務所を後にした。

ーーーーーーーーーーーーーー

２人はまず、古畑が最後に鍵を確認したという地下鉄のプラットフォームを訪れた。

「御免！駅員さんちょっと」
「どういたしました？」
「落とし物で鍵が見つかってないかな？」
「少々お待ち下さい」

駅員が引っ込んで、少しすると数本の鍵を握って戻って来た。

「幾つかありますが、この中にございますか？」
「古畑さん、どうです？」
「残念ながら・・・」

やはり、そう簡単に見つかりはしない、というか今見つかっていたらかなり楽な仕事だ。
そんなに楽な仕事はそうそうあるものではないことを、誠也は百も承知している。
誠也はあちこちを調べだした。ベンチの裏、線路の上、屑籠の中。
しかし、見つからない。

「駅員さん、ありがとね。古畑さん、次に行きましょう」

誠也はそう言うと、古畑と次の場所へ向かった。
この場所に来た時からの、何者かの視線を感じつつ誠也は行く。

ーーーーーーーーーーーーーー

その後、古畑の案内で様々な場所を巡ったが、鍵は結局見つからなかった。

「今日は諦めましょうか、何時までに見つければいいんです？」
「今週中にお願いできれば助かります」
「わかりました、ところで依頼料金ですが後払いで構いませんよ。え～といくらくらいになるかな・・・」
「今のところ、５万円お支払いしようと考えております」

思いがけない金額に、誠也は驚愕した。

「ちょっと待って下さい、鍵一つ捜すのにその料金ですか？」
「少ないでしょうか？」「とんでもない！」

ここにきて誠也は、金庫の中身が気になった。
５万もかけて捜す鍵だ、大層な物が入っているに違いない。

「失礼ながら、金庫の中身をお教え願えませんか？」
「おお、私こそ初めにお教えするべきでした。中身は父の遺産です」

誠也は納得した。
遺産というからには金庫には大金が入っているのかもしれない。

「父が亡くなる前に金庫の鍵を譲られたのですが、開ける前にこの通り無くしてしまいました」
「なるほど、わかりました。後は私にお任せ下さい」
「では、改めてお願いします」

２人は公園で別れた。
誠也は腕時計を見た、時刻は午後３時だ。
雲行きが怪しい、雨が降り出しそうだ。
誠也は事務所へ向かった。

誠也が事務所へ着いた途端に雨が降り出した。
事務所に入ると、誠也を黄泉が迎える。

「黄泉ただいま、寂しかったか？」

誠也は椅子に腰掛けた。
手帳を開き、今日古畑に案内してもらった場所、一昨日彼が取った行動を確認する。
誠也は紅茶を啜り、不敵な表情で呟いた。

「ま、だいたい見当は付いてるんですがね」

第二話「暗闇の鍵（前編）」（後書き）

みなさま遅くなりました、ごめんなさい。
話の構成を考えるのに手こずりまして（―｜―；）

さて、今回は戦闘シーン無し！
お許しを・・・

ちなみに誠也の飼い猫「黄泉」
さて、どこから取ってきた名前でしょうか？
ヒント・誠也の性「諫山」、某アニメからです。
次回をお楽しみに！

第三話「暗闇の鍵（後編）」（前書き）

困ったことに、タイトルがあんまりしっくりこない（笑）
まあこのあたりは目を瞑っていただきたい・・・
では第三話、どうぞ！

第三話「暗闇の鍵（後編）」

翌日　１２月１５日　午前１１時

誠也は午前7時に急遽舞い込んだ窓拭きの仕事を迅速に終わらせると、事務所に帰りまたすぐに出かけた。
そして今、彼は昨日古畑に案内された地下鉄のプラットフォームにいる。

（古畑はここで鍵を取り出した・・）

昨日、誠也は古畑の記憶から巧く情報を引き出していた。
どうやら、彼はここで鍵を取り出して遺産について呟いたらしい。
軽率である。

誠也は懐から札束を取り出し、次はポケットにしまった。
それから地上に出るため歩きだす。
すると、後ろから何者かがつけてくる気配がした。
何者かは誠也が警戒しないように、一定の距離を保って追ってくる
（はじめから警戒しているが）
突然、気配が近くなった。ポケットに何者かの手が差し入れられーーー

「太一、やっぱりお前か」
「うわあ！？」

何者か＝佐久間太一は慌てて誠也のポケットから手を引いたものの、
もう遅かった。

「まだこんなことやってたか、この馬鹿！」
「すみません・・・」
誠也は太一を叱りつける。
太一のスリは今回が初めてではない。何度か誠也にバレてしまっている。
今回もこのように捕まる辺り、学習能力に欠けているのだろう。
しかし捕まる度に「足を洗う」という太一をどうしても警察に引っ張れず、毎度注意するだけで見逃してしまっていた。
「今度という今・・じゃなくて鍵はどうした？」
「か、鍵ですか？なんですそれ？」
「しらばっくれるな、ほーら3日前辺りにさっきみたいにスったよな？」
太一の丸顔が一気に青ざめた。
「なんであんなものスったんだ？お前はあの鍵で開けられる金庫を持っていないだろ」
「許して下さい！あいつ金庫がどうとかいくら入ってるんだろうとか言ってて・・・後々になってからあいつの家に忍び込もうと思ってたんです」
「まったく古畑さんも迂闊だよなあ。ほら、返せ。それさえ返れば俺の仕事も終わる」
しかし、太一は後退りをはじめた。
「太一？」
「諫山さん、悪い！」

太一はもの凄い勢いで駆けだし、線路の上におりてその奥へと逃げた。

「おい！待てよ、それがないと依頼が完遂できないだろ！あーもうバカが！」

逃走をはじめた太一を誠也は追った。
どれくらい走っただろう、いつの間にか2人は地下鉄の線路をかなり進んだあたりを走っていた。

「バカ！危ないから早く止まれ、電車が来たらどうするんだ！？」
「くっそぉー捕まるわけには・・ん？うわああ！」
「太一、どうした？」

突然、目の前を走っていた太一が悲鳴を上げ、尻餅をついた。
駆け寄る誠也は太一のすぐ側に何者かの姿を認めた。
暗いため影になってはっきり見えないが、影はユラユラと揺れ呻き声を上げていた。

「太一！・・寝たのか、あれはなんだ？」

気を失った太一に目をくれず、影は近づいてきた。
相手の姿がはっきり見えた。
映画やゲームに登場する「ゾンビ」がそこにいた。
あちこちから呻き声が聞こえてきた。かなり数が多いようだ。
集まってきたゾンビ達には作業服の者が多かった。

（そういえば、地下鉄で作業していた作業員が行方不明になったってえ事件があったが・・・）

ゾンビ達はユラユラと揺れながら呻き声を上げている、いつの間にか囲まれていた。

「おうお前ら、元気だねえ。ざっと見たところ２０人くらいか？悪いんだけど放置するわけにはいかないからさあ・・・斬らせてもらいましょ？」

誠也はいつの間に着けたか、腰のライダーバックルにトランスキーを差し込んでいた。
誠也は変身ポーズを取り叫ぶ。

「変身！」

誠也は仮面ライダーザンに変身した。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

まずザンは、目の前にいた作業用ヘルメットを着けたゾンビを、鞘から抜き放った宝刀「水晶刀・岩斬り」で袈裟懸けに斬り捨てた。
背後からゾンビが近寄ってきたが、ザンはゾンビを鞘で打つと振り返りざまに一閃する。
目前に迫れば斬り、背後から近づけば斬り、その繰り返し。
５分も経つと、ザンは相当な数のゾンビを仕留めていたが、一向に数は減らない。

「く！やっぱ大将斬るしかないか・・・おーい大将～！」

ザンはゾンビの群を纏める者を求め、群に向かって駆けだした。
無論、進路上にいるゾンビを凄まじい速度で斬り捨てながら。

群の中をどれくらい進んだだろう。
突如としてザンの目前にゾンビより体格の大きい怪人が現れた。
青い体色、頭に2本の角、口からは上に大きく飛び出た牙、恐ろしい形相をしており、右腕に金棒を持っていた。

「大将、捜しましたぜ～・・・青鬼か」

怪人＝青鬼は金棒を振りかぶり、ザンに振り下ろす。
しかし、ザンは横に動くことであっさりかわした。
青鬼は金棒を真横に降り回したが、今度はザンが跳躍し金棒の一撃はまたも空振りに終わる。
跳躍したザンは、青鬼の背中に空中で一太刀浴びせてから真後ろに降りたった。
普段の相手ならばこれで一撃だが、青鬼は別格らしい、あまり斬撃が効いていない。
青鬼が振り返る。ザンは辺りのゾンビを斬り伏せると、青鬼と間合いを取った。

「流石は大将、一撃じゃあ沈まないな・・・そうだ！斬ってばかりじゃ芸がないよね」
『ｄｒｉｖｅ』

ザンはバックルを外すと、舞うような滑らかな動きで頭、胸、腹、両腕、両足にバックルの裏側を当てた。
身体に付与されたエネルギーで、ザンの身体が色鮮やかに発光する。

「受けてもらおうか・・ライダーキック！」

ザンが青鬼に向かって跳躍した。
ザンは空中で前転し勢いを増し、右足でエネルギーを帯びた渾身の

跳び蹴り「ライダーキック」を放つ。
青鬼も黙ってはいない、金棒でザンを迎撃した。
「とおりゃぁーー！！」
次の瞬間、金棒を粉砕したザンは青鬼を突き破り、後ろで青鬼が美しく光り輝きながら爆発した。
ゾンビ達は、青鬼を撃破されたことで身体が溶け、闇へと還った。
「よ～し、お終い・・・おお、太一はどこだっと」
佐久間太一は気絶したままだった。
ザンは変身を解除し誠也に戻ると、太一を担ぎ、プラットフォームに戻っていった。
太一の懐から鍵を抜き取ることも忘れない。
太一はプラットフォームに運んで、少ししてから意識を取り戻した。
太一はキョロキョロとあちこち見回している。顔が引きつっていた。
「ゾンビは！？」
「太一、気がついたか！で、何を言ってるんだ？」
「諫山さん！大変です、ゾンビがいるんですよ！鉄道にゾンビがぁ！」
「？？、俺が追いかけたらお前は転んで気絶しただけだ。夢だよそりゃ」
誠也は嘘を言った。
太一は怪訝な顔をしていたが、納得した様子で頷いた。
「なるほど、まあそうですよね、現に喰われてな・・あれ、鍵がな

い！」
「鍵はここ、悪いが貰ってくよ」
「そんなあ、待ってくれ！」
誠也は腰が抜けた太一を置き去りにし、事務所へと去った。
しかし、またしても太一を警察に連れて行き忘れていることに気がつかない誠也であった。

ーーーーーーーーーーーー

１２月１５日　午後２時

事務所に帰ると、黄泉が待っていた。
黄泉の頭を撫で、すぐに電話を取った。掛けるのは古畑の携帯電話だ。

『もしもし、古畑です』
「こちら、風花の諫山です。お捜しの鍵が見つかりました」
『ほんとですか、ありがとうございます。仕事が終わってから取りに行きます』
「何時頃になるでしょうか？」
『６時半辺りになると思います』

誠也は電話を切った。
それから４時間半の間、誠也は様々なことをした。
まず、身体が気持ち悪いので黄泉と風呂に入り（不思議なことに黄泉は猫でありながら風呂を嫌がらない）
それから昼寝（無論黄泉と）、ラジオ、剣術・格闘の鍛練。
こんなことをしている内に、あっという間に４時になり、黄泉と散歩に出かけた。

帰ってきたのが5時半。
誠也は依頼の内容をレポートに纏めはじめ、気がつくと6時半になっており、古畑が訪ねてきた。

「古畑さん、よくいらしてくれました」
「どうも、この度は本当にありがとうございます」
「さあ、鍵です、お受け取りください」
「本当に助かりました、では依頼料を」

古畑は懐から封筒を取り出した。
かなりの厚みだ。

「古畑さん、まさか全部千円で払うんですか？」

誠也は苦笑しながら茶化して言ってみるが、中身は千円札ではなかった。
福沢諭吉がいる、１万円札だ。

「ちょっ、古畑さん！え～と・・・４０万入ってますよ！？」
「いや、あの金庫の中身ですが、どうやら合計４千万のようなのです。昨日の夜にタンスから見つかった父の日記から発覚しまして、そのため１００分の１の４０万をお支払いします」
「はあ・・・いやちょっと待ってくださいよ、鍵を捜しただけなのにこんなにも」「では、ありがとうございました」

古畑は誠也の話を聞かずに事務所を出た。

（金庫の中身、まさかそれほどの大金だったとは。なんだか太一に凄く悪い気がしてきた、って盗みは良くないな・・・まあ後で少しだけ分けてやるか。しっかしこれでしばらくは金に困らなくて済む

ぞー）

このようなことを考えて佇む誠也の周りを、黄泉が誠也の脚にすり寄りながら何度も回った。

第三話「暗闇の鍵（後編）」（後書き）

皆様、この度も（？）ザンをご覧いただきありがとうございます。
今回の要点（？）を纏めますか。
まず依頼完遂。
まさかの鍵探しでいきなり大儲け！
普通こんなこと無いよ、依頼人自重しようか。
これで誠也は黄泉に高い魚を買えます（笑）
太一は・・・毎度見逃されるあたりある意味恐ろしい男（｜＿｜；）
ゲストのためもう出ないと思います（笑）

それとまともな怪人登場。
青鬼、ええ、あの青鬼です。
まあ、可愛いディフォルメ版を想像してもらうと困りますが（＾＾；）
ゾンビを使役するというおっかない力があります。
いい加減、ザンが楽勝しまくるのはまずいですから強い敵が必要でして（でもあまり苦戦してないよね）

そしてライダーキック！
非常に強力ですが発動までの隙が大きいため、あまり使いません。
岩斬り必殺の方が手っ取り早いし、消費エネルギーも少ないです。
ただし、必殺技の破壊力はライダーキックが一番高いです。

次はクリスマス回、その後は登場キャラクター紹介です。
クリスマス回はまさかの「やつら」が・・・早めに更新します。

未だ謎の多い本作ですが（例えばライダーバックル及び岩斬りの出所）追々明かします。

では、次回をお楽しみに！

仮面ライダーザン・クリスマスの特別編「誠也の聖夜」（前書き）

クリスマス回です！
まあ、タイトルが下らないおやじギャグなのはおいておき（笑）
では、どうぞ！

仮面ライダーザン・クリスマスの特別編「誠也の聖夜」

１２月２４日　午前７時

誠也は起床すると、まずはいつも通り朝食を食した。
次に歯を磨き、顔を洗い、普段着に着替える。
普段ならば誠也が起きると黄泉も起きてくるが、今日は何故か起きてこなかった。

ちなみに１６日から今日までの風花の様子をここに記しておこう。
１２月１６日　矢崎徹平より依頼されていた怪人物調査の依頼の資料を送る（無論ダミー）
１２月１７日　仕事無し
１２月１８日　午後から荷物運びの仕事
１２月１９日　午前中に車を移動させるする仕事、午後に酒場にて清掃の仕事
１２月２０日　仕事無し
１２月２１日　用事があり休業
１２月２２日　午後に護衛の仕事
１２月２３日　午前中にイルミネーション取り付けの仕事
このような具合である。
ちなみに今日は仕事を請け負う気はない。彼が勝手に決めた休日である。
尤も、非常に困った様子の依頼人が訪れれば、仕事を請け負ってしまうのが誠也なのだが。

「さあて今日はクリスマスイブ、リア充どもの祭りだなあチクショウ！」

誠也が訳の分からないことを言ったが気にしてはいけない。
少しすると黄泉が起きてきた。
目がまともに開いていない、まだ眠いのだろう。

「黄泉ちゃんおはよう、さあご飯だ」

誠也は黄泉を抱き抱えると、食事入れを置いた場所まで連れて行った。

ーーーーーーーーーーーー

午前9時

誠也がいつもしているように鍛練を始め、それが終わると椅子に腰掛けラジオを聞いていた。
今日はクリスマス・イブ。
夕飯は豪勢にいきたいと考えた誠也は、買い出しに出かけることにした。

「黄泉ちゃん、出掛けてくるからね」

誠也は事務所を出ると、ガレージに降りた。
今日はバイクに乗り、普段は行かないデパートに行くことにした。
やはり冬は寒い。
空気は凍え、風はまるで身を切るかのような冷たさだ。
デパートに着く頃には、粉雪が舞い始めていた。

（明日はホワイトクリスマスか？）

デパートは3階建てで、なかなか大きく品揃えも定評がある。

バイクを停めた誠也はデパートに入った。

やはり、大方の予想通りデパートは混んでおり、買い物をするのに苦労した。
まずは食品売場。
本来ならば最後に行くべきだが、ここが一番混雑していなかったのではじめに訪れた。

「ケーキ、鳥の脚、うーむもつ煮も旨そうだな」

誠也は散々悩んだ挙げ句に鳥の脚を４本、即席もつ煮セットを１つ、チーズケーキを２つ購入した。
鳥の脚とチーズケーキは黄泉の分も買った（黄泉はおかしな物でなければ大抵食すのだ）

次に、デパートのあちこちを冷やかすことにした。
ゲームセンターで「太鼓の達人」を見物し、紳士服売場でハットを被り（似合わなかった）、玩具売場でプラモデルを見たり。
そして、雑貨売場に立ち寄った際に誠也は「それ」を見つけた。

「な、なんと、これは・・・買いだ！」

誠也が雑貨売場で見つけた物は・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

午前１２時

誠也がデパートを出て１０分程経った。
道路を走る誠也のバイクの前方に、突然全身黒タイツの男達が現れ

た。
頭も覆面で覆っており、覆面、黒タイツ共に白地の模様が入っている。
その数、６人である。

「な、なんだお前ら、もしかして変態か！？」

面食らう誠也に男達は「イー！」という甲高い奇声を上げ、襲いかかってきた。

「おいおい・・・手加減はしないぜ？」

誠也は全身黒タイツの男達と対峙した。
なお、これより暫しの間、男達を「黒タイツ」と略すこととする。
しかし、決して誠也が戦っている相手は衣類の類ではないことを、頭に入れておいていただきたい。

先手を打ったのは黒タイツ、一人が蹴り、もう一人がパンチを放つ。
しかし、誠也は蹴りを回避しパンチを受け止めると、パンチをした黒タイツに体当たりで反撃。
体当たりを受けた黒タイツはそのまま蹴りで攻撃してきた黒タイツにぶつかり、その隙を突いた誠也の蹴りをまともに腹に受けた。

「はっ！こんなもんかい？」

次に襲いかかってきた２人の黒タイツは、先ほどの２人より連携が取れていた。
誠也は慌てずにまず１人に掌底（しょうてい）を当てた。
うずくまった黒タイツを膝蹴りで仕留めると、もう１人に向かって仕留めた黒タイツを投げた。

倒れた黒タイツを踏みつける誠也、しかしその鼻先を剣が掠める。
残った2人の黒タイツは、剣を持っていた。

「お前ら・・・喧嘩じゃ済まなくなるけど良いのかい！」

誠也はライダーバックルにトランスキーを差し込み、岩斬りを覚醒させた。
あくまで岩斬りを覚醒させるためであり、変身のためではない。
黒タイツの激しい斬撃、しかし誠也は全て見切って避け、時に岩斬りで受け流した。
誠也が駆け抜けた。刹那、黒タイツが崩れ落ちる。
駆け抜けると同時に岩斬りを振り、2人の黒タイツに一撃づつ加えたのだ。無論、無駄な殺生を避けるために峰打ちである。

誠也に勝てないと悟った黒タイツの男達は、ボロボロの状態で退却を始めた。誠也は追おうとするが、突然現れた灰色のオーロラに彼らは包まれ消えてしまった。
誠也もオーロラに飛び込もうとするが、誠也が飛び込む前にオーロラは消えた。

「逃げられたか、変な奴らだったが逃げ方も変わってたな・・・何だったんだろう？」

誠也はトランスキーをバックルから抜き、再びバイクに跨がると帰途についた。

ーーーーーーーーーーーーーー

午後1時

事務所に帰り着いた誠也は、まず黄泉に「デパートの雑貨屋で見つけたもの」を使おうとした。

「ほ～ら黄泉、君はこれを着なさい」
誠也がデパートの雑貨屋で見つけたもの＝猫用サンタコスチュームを着せようとすると、黄泉は逃げようとした。
しかし、誠也は黄泉を抱きしめると無理矢理着せる。
ある意味、動物虐待および変態的光景である。しかし、黄泉は態度こそ「拒否反応強」だが実は嫌でなかったりする。

5分後
サンタコスを着せられた猫の姿が、風花の事務所にあった。

「黄泉～もうお前ったらほんと可愛いなあ！」

誠也はかなり満足したらしく、黄泉を抱きしめた。
黄泉はいつもよりも恥ずかしそうにしており、誠也のされるがままになっていた。
尤も、黄泉は仕草にこそ出さないが、このようなスキンシップを非常に喜んでいるのだ。

その後、食事を済ませた誠也。
今日は珍しく昼寝を始めた、無論黄泉もいっしょに寝ている。

午後4時
誠也は黄泉を連れて散歩に出る。
今日は雪がチラチラと降っているため、公園には行かずただ道を歩き続けた。
歩きながら、誠也はふと考える。

（あいつら、何者だったんだろ）

「あいつら」とは正午襲いかかってきた、全身黒タイツの６人のことだ。

（突然現れて突然消えて、もしかして・・・ああいうのを宇宙人と呼ぶのか！？）

誠也はまったくトンチンカンな答えを出して納得した。
誠也は某ガックンの歌（何故かクリスマスソングではなくウエディングソング）を歌いながら誠也は事務所へ帰った。

午後１０時

食事をし、歌を歌い（黄泉も鳴き声で歌った）、食器洗い、読書。
そして今、誠也は黄泉と布団の中である。

「なあ黄泉、また来年のクリスマスも俺と一緒に居てくれるかい？」

誠也の問いに、黄泉は頬ずりで答えた。

「ありがとな、なんだよ俺にもいるじゃない、立派な彼女が」

誠也は心底嬉しそうに笑った。黄泉もしっぽを絡ませてくる。
黄泉と居られることが今の誠也には非常に幸せなことで、しかし黄泉にとっても誠也と暮らすことが幸せなのだ。
黄泉に感づかれないように、誠也は枕元にプレゼントの箱を置く。
中身は・・・まだ黄泉さえ見ていないプレゼント。
先に読者諸君が知るのはあまりにも無粋だ。ここは敢えて語らずにおくとしよう。

まだ誠也は知らなかった。
昼間襲いかかってきた全身黒タイツの男達が、恐るべき組織の尖兵だったこと。
そして、自分達の住む世界がやがて彼らの標的になってしまうことに・・・

仮面ライダーザン・クリスマスの特別編「誠也の聖夜」（後書き）

ということで、仮面ライダーザンのクリスマスの特別編でした。
いかがでしたか？
変身こそしなかったものの、一応戦闘シーンあり。
相手は・・・解らない人はいませんよね？

さて、まさかの「奴ら」の登場。
ザンの世界に訪れる戦乱の予感。
気になることは多いでしょう、しかし一番気になるのは・・・

誠也と黄泉ちゃんの関係（笑）
なにこの恋愛描写！？って思われた方がいそうなので。

まず誠也は、単純に黄泉ちゃんを家族としてみています。
今回ラストで「彼女」とまで言ってくれましたが、あれは冗談です（^^；）
現在全く恋愛対象に入ってません。

次に黄泉ちゃん
彼女は誠也ＬＯＶＥです（；「―「）
誠也を完全に男としてみています。
しかし、困ったことに誠也は人間。黄泉ちゃんの恋の行方は！？（笑）

次回はキャラクター紹介。
怪人・妖魔や仮面ライダーについても記述します。
お楽しみに！
これからも宜しくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7191y/

仮面ライダーザン　剣客稼業

2011年12月25日02時52分発行